

1日 水曜

I サムエル



18:1 ダビデがサウルと語り終えたとき、ヨナタンの心はダビデの心に結びついた。ヨナタンは、自分自身のようにダビデを愛した。

18:2 サウルはその日、ダビデを召しかかえ、父の家に帰らせなかった。

18:3 ヨナタンは、自分自身のようにダビデを愛したので、ダビデと契約を結んだ。

18:4 ヨナタンは着ていた上着を脱いで、それをダビデに与え、自分のよろいかぶと、さらに剣、弓、帯までも彼に与えた。

18:5 ダビデは、サウルが遣わすところどこへでも出て行き、勝利を収めた。サウルは彼を戦士たちの長とした。このことは、すべての兵たちにも、サウルの家来たちにも喜ばれた。

18:6 皆が戻り、ダビデがああペリシテ人を討ち取って帰って来たとき、女たちは、イスラエルのすべての町から、タンバリンや三弦の琴をもって、喜びつつ、歌い踊りながら出て来て、サウル王を迎えた。

18:7 女たちは、笑いながら歌い交わした。「サウルは千を討ち、ダビデは万を討ちた。」

18:8 サウルは、このことばを聞いて激しく怒り、不機嫌になって言った。「ダビデには万と言い、私には千と言う。あれにないのは王位だけだ。」

18:9 その日以来、サウルはダビデに目をつけるようになった。

王子ヨナタンはダビデの人柄を愛し、尊敬によって友情を結びました。彼には王位や上下関係よりも、人の純粋なたましいを大切にす、神の価値観があったのです。彼はまた父の次に権威ある者として民を指導してゆくべき地位にありましたから、理解

者や助言者や同労者を必要としていたのでしょう。ヨナタンの真摯な思いがわかります。

一方民は（女性たちの盛り上がりでわかるのですが）、ダビデの目に見える結果を単純に讃えました。それ自体は良くも悪くもないのですが、主にもサタンにも用いられる可能性があります。ここではサウルを不安にするための要因にもなりました。そのような人々もいるということは考えておくこともよいでしょう。

サウルはダビデを「疑いの目で見るようになった」のですが、それは全く自分本位な思いです。なぜなら主の御心から離れたからです。人間的に見れば、祭司以外の者がいけにえをささげても、また戦利品をてに入れても問題ないように感じますが、神の命令から離れてしまうなら、自分の思いのままに生きてしまうのが人間なのです。

神の御心にこそ永遠の価値観があるということをお忘れないようにし、御心からそれではないかどうかを、よく吟味しましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

